

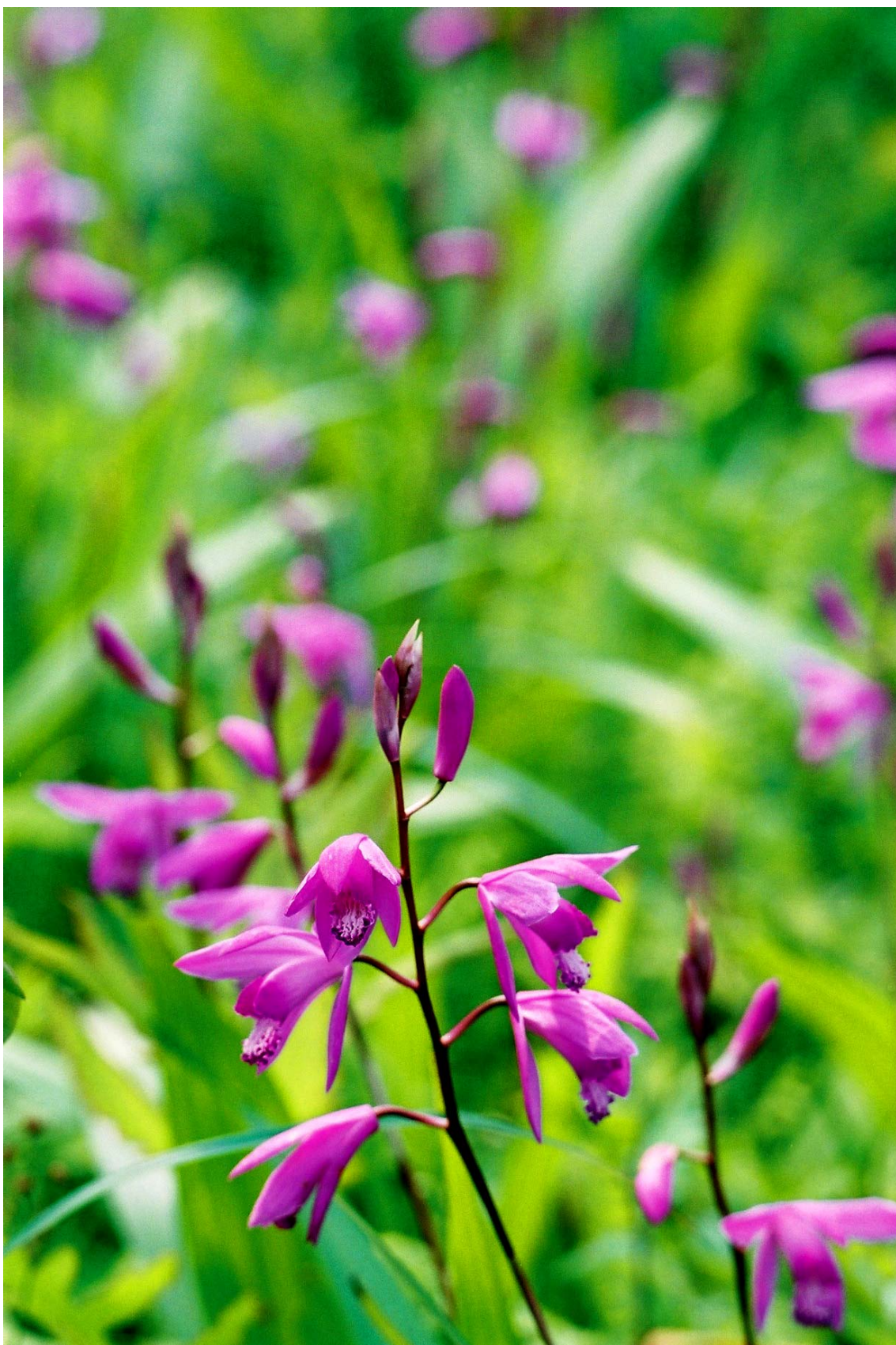
12) シラン=紫蘭

シランはラン科の多年草で、関東以西の山野のやや湿った草地や林縁に自生して群落をなすこともあり、朝鮮半島や中国にも分布する。しかし今では野生のものは見ることができず、ほとんどのものが栽培されたものである。長楕円形の葉は長さが20~30cm、幅2~3cmで4~5枚が互生して、縦に線状の皺が入る。晩春から初夏にかけて、葉の間から30~70cmの花茎を出し、紅紫色の花を数個まばらにつける。花色は紅紫色の他に白色のものもあり、園芸種には葉の縁に覆輪の入る覆輪シランなどがある。根には『偽鱗茎』(ギリンケイ)があつて1年で1つずつ増え、エビネ状に連なり薬効がある。和名の由来は花の色からで、別称としてはベニラン、セイダカ、ケイラン、シュロランなどである。学名は『*Bletilla striata*』で、属名はスペインの薬剤師ブレット氏の名に因み、種小辞はシマのあるという意味で、葉の形状に由来する。中国での呼称は『紫炭』とか『白炭』などで、これも花の色に由来している。

さてキンランやシュンランで見てきたように、ラン科の植物の種子は一般的には特別な条件が整わないと発芽しないものが多く、人工的に栽培したり、繁殖したりするのが難しいものも少なくない。そんな中であつて、このシランは極めて丈夫な植物で、乾燥地からかなりの過湿地にいたるまでよく適応し、半日陰から日向まで、また畑地のようなところでもよく育つ。このため公園や一般家庭の裏庭などで、群落になることも多く、栽培しやすいことで定評がある。また種子からの繁殖もしやすく、特に西洋蘭で用いられる無菌培養地に少量の糖分を加えて播種すれば、ほとんど100%に近い発芽率を得ることができる。しかしその一方では花が美しいところから、野生のものはほとんど見ることができず、準絶滅危惧種に指定されている。繁殖力はあるところから野性にかえす人間の努力が必要である。

シランの『偽鱗茎』を熱湯につけて日干しにしたものは粘液を含んでおり、漢方では、これを白炭(ビヤクキュウ)と呼んでいる。皮膚や粘膜を保護する作用があり、痛みを止めたり、腫れを治すのに用いる。また、止血作用があるため、咯血、胃や腸の穿孔による出血、鼻血など内外出血にも用いられている。中国では気管支拡張症による咳嗽(ガイソウ)や血痰を伴う場合には、粉末を服用するという。また火傷には粉末を油で練り、あかぎれには水で練って塗布すると効果があるとされている。

ところでシランはしばしばイギリスでは『死人の指』と呼ばれるなどと記述されている。しかしこれはエゾミソハギ(学名は『*Lythrum salicaria*』)のことで、シランではない。これはシェイクスピアの戯曲、『ハムレット』に登場する台詞を明治時代に誤訳したことによるものというのが定説である。もともとハムレットには暗殺される者、毒殺される者、誤殺される者、溺死する者、シェイクスピアの4大悲劇の一つだけあつて、物語の展開は余談を許さない。そんな緊張感の中で翻訳者は、つい植物の名前の部分で誤って訳してしまったのだろう。



シランはラン科の中では繁殖力が極めて旺盛な植物である(神奈川県箱根町湿性花園)。



珍しい白花のシラン。しかし繁殖力は紅花よりずっと劣る(栽培品)。

[目次に戻る](#)